



名古屋市蓬左文庫 HÔSA LIBRARY, CITY OF NAGOYA

NO. 60

和歌から短歌へ

- 雑賀重良氏の蔵書から

島津 忠夫

良氏が一代で蒐集されたらしいことを知り、 成のために購入すべき覚書が記されており、雑賀重 年から昭和五年までの歌書を書き記し、歌書年表作 告の裏面を閉じ合わせ、真ん中に線を引き、 現代短歌と繋がっており、 から、明治初期の旧派和歌、 雑賀氏二代の蒐書を考えていた。近世後期の桂園派 倒される。この蔵書群を瞥見して、 その努力と熱意に感心した。 雑賀重良編『明治大正架蔵歌集一覧』を見ると、広 は困難だと思ったからである。しかし、 雑賀重良氏旧蔵書は、まずその厖大な歌書群に圧 とても一代の蒐書として 新派和歌、 、私はその背後に たとえば、 近代短歌、 明治三 改めて

とでもありがたいのである。 を引くことによって、その存在を知ることができる 生から始まることはいうまでもない。そのことを明 の明治期の旧派の和歌の使用が豊富に揃っているこ つきとめることが困難なのである。この蒐書は、そ が、明治期のものは、どこに所蔵されているのかを くいのである。 いくらも存在した旧派の資料が今ではなかなか見に おさえておくことが必要である。ところが、当時は らかにするには、当時の旧派和歌の世界を具体的に 竹柏会、正岡子規の根岸短歌会による新派和歌の誕 る。近代短歌は、落合直文の浅香社、 とって、この蒐書はまことにありがたい資料群であ いう雑誌が明治二十五年三月の第一号から明治二十 かねてから「和歌から短歌へ」を考えている私に 近世末期までの書は たとえば、 『国書総目録』 佐佐木信綱の

> 四月五日 その第四巻第四号を繰っていると、「明治三十九年 る。明治三十九年五月の第四巻第四号から大正二年 日本歌道奨励会から出ている「歌」という雑誌があ 八月の第十一巻第八号まで断続的に残っているが、 のわずかしか残っていなかったことを思い出す。大 て必要があって近代文学館まで出向いてみたがほん まで欠号はあるもののかなり揃っており、 出ている「国文学」も、第一号、第七号以下第百号 である。明治書院から明治三十二年一月に第一号が 学発行の趣旨に添ふ」の文章が見えるといった具合 六年四月の第二巻第四号まで揃っているが、 一号には、落合直文の「賛成のゆゑよしを述べて歌 御兼題詠進写 風静花盛」の中に、 私はかつ

さくら花さきの盛とこ、ろしてさはらぬほとの一首を見出した。原田琴子は「明星」末期からなが、この旧派の雑誌に琴子の名が見えることにあるが、この旧派の雑誌に琴子の名が見えることにお意したい。ていねいに探せば、ほかにも旧派から注意したい。でいないに探せば、ほかにも旧派からは発して新派歌人として活躍した人の過程が探れるかもしれない。琴子と同時に活躍した周本かの子はかもしれない。琴子と同時に活躍した周本かの子はである琴子の歌集が見えないのは私には不思議に思われる。

の新聞電車ごう〈〜と屋上の黎明を衝いてはしる見ろ一輌

職工は野を歩きまはる 疲れを空に吸ひとらせようとする口笛 昼休の以下十一首が並び、巻末には、五島美代子の

非常に好意的であるのもおもしろい。 歌壇評―」には、 きが、近代短歌から現代短歌への展開を考える上に ってから『新風十人』刊行に至るまでの短歌史の動 下の「短歌前衛清規」がある。「日光」が廃刊とな ロレタリア短歌の研究を主なる目的にしてゐる」以 っている。その「短歌前衛」には、「一 年九月)から第二巻第一号 れている。それに対し、 創刊号のほかに、四月号・五月号・六月号も収めら が執筆しており、 以下十一首が並んでいる。さらに、 (昭和四年三月)、 石榑茂・前川佐美雄・五島美代子 「香蘭」二月号の石川信雄の作に 「短歌前衛」は創刊号 「短歌戦線」第二巻第三号 (昭和五年一月)まで揃 「今日の批 「尖端」は、 本誌はプ (昭和



えて知ることができるのである。が、これらの雑誌により、当時の感覚を如実にふまきわめて重要であると私は考えるのであるが、それ

その近代短歌の蒐書には、やはり蒐集者の好みがある。晶子・白秋・啄木・茂吉・信綱・勇・牧水がある。晶子・白秋・啄木・茂吉・信綱・勇・牧水がある。晶子を集められていることである。晶子などは、とくに多く集められていることである。晶子などは、とくに多く集められていることである。晶子などは、とくに多く集められていることである。「蓬左」57号(平成九年十月四日発行)には、「雑賀重良収集歌書展」の折に展示された『みだれ髪』各種の写真が掲展」の折に展示された『みだれる。「蓬左」57号(平しようとされたことが知られる。 雑賀氏の晶子にで刊行された三十六種が見られる。 雑賀氏の晶子に対する思い入れが知られるとともに、晶子は版を変えるごとに改訂を施しており、その過程を知る上にも必要な資料となる。

姫』の初版本を取り出して見た。香気あふれる初版 年七月に岡山血汐会から出た稀少本三木露風『夏 版本が見られる。それらの中から、私は明治三十八 南北』(明治二十九年刊)、吉井勇『酒ほがひ』 暮『収穫』(明治四十三年刊)、与謝野鉄幹『東西 窪田空穂 『空穂歌集』 (明治四十五年刊) 、前田夕 年刊)、みづほのや(太田水穂)『つゆ草』(明治 はいないが、目録を見ると、 やはり初版本の持つ独特の味わいには何とも言えな 本の美しさをそのまま保っており、 三十五年刊)、北原白秋『桐の花』(大正二年刊)、 い香気を感じる。まだ、いちいち取り出しては見て でかなり容易に見ることができるようになったが、 (明治四十三年刊)、若山牧水『海の声』 (明治四十三年刊)、『悲しき玩具』 (明治四十五 晶子の『みだれ髪』の初版本など、今では複製本 (明治四十三年刊) などの初 石川啄木『一握の砂』 さらに、 (明治四 竜野市

られているのもゆかしい(五頁写真)。付きで出された複製本もあり、それも合わせて収めの霞城館から昭和五十四年に家森長治郎氏の解説

近代短歌から現代短歌への過程を知る資料として近代短歌から現代短歌への歌集の多くをこの蒐書が々列挙しないが、それらの歌集の多くをこの蒐書が々列挙しないが、それらの歌集が多くあり、いまーり上げられなかった重要な歌集が多くあり、いまーり上げられなかった重要な歌集が多くあり、いまーり上げられなから現代短歌への過程を知る資料として

ることができるであろう。 かの子・北川英美子〈蝠亭〉・山田〈今井〉くに子 明治四十一年六月、新潮社刊)には、大貫 平・三木露風らが見え、『白光』(与謝野晶子選。 白日社歌集第一集)など、さまざまな問題を読みと の合同歌集『発生』(前田夕暮選。 ・米田雄郎・楠田敏郎・狭山信乃・前田夕暮ら十人 ・中川一政・富田砕花の名が見え、また、熊谷武雄 淵堂刊)には、明星投稿歌人を主とするが、半田良 田先生評、 才媛歌集』 『黒髪』(与謝野晶子選。明治四十年一月、 個人歌集ではなく合同歌集の類を見ても、 (石川正作編。明治三十四年六月刊、下 坂先生評)の旧派女流の集もあれば、 大正四年三月、 〈岡本〉 金尾文 『明治

資料がある。目録を見て行くと、今後参考にしたい資料がある。目録を見て行くと、今後参考にしたいる。さきにあげた旧派の雑誌には、ほかに、「大八別」などがあり、近代短歌に入ってからのもので八月)などがあり、近代短歌に入ってからのものでも、神戸春潮社(坂田吉郎発行)の「関西詩歌」(第一年五月 山本あきら号)「近代詩歌」(第一巻十一年五月 山本あきら号)「近代詩歌」(第一巻十一年五月 山本あきら号)「近代詩歌」(第一巻十一年五月 山本あきら号)「近代詩歌」(第一巻十一年五月 山本あきら号)「近代詩歌」(第一巻十一年五月 山本あきら号)「近代詩歌」(第一巻 大正十四年五月 山本あきら号)「近代詩歌」(第一巻)

と思われるものはきわめて多いのである。

私は、目録から『歌人等著名人肖像・筆蹟・作品 等印刷物切り抜き』というものを取り出して見た。 短歌に関する記事を、雑誌や新聞の類から実にたん ねんに切り抜きされている。とくに歌人の肖像がこ まめに切り抜かれており(それが蓬左文庫で一枚ず つ整理されていることにも感心した)、出典のわか らないのが惜しいが、今ではこの歌人がこんな顔を していたのかということがわかり面白い。

晶子に関するコレクションはどうなったのだろう と思う。それにつけ、 勧めたが、いずれは貴重な資料となることであろう 集めることは困難だから現代のものを集めることを 創設するにあたり、その大和文庫に、今から古書を なるであろう。岐阜県郡上郡大和町で和歌文学館を によって、 のあることを聞いている。これらを合わせ見ること あるが、愛知教育大学にも近代短歌のコレクション 氏旧蔵書(『山崎敏夫文庫目録』)があり、 立大学の蔵書 (矢野貫一氏編 「近代歌集総目録」 『日 の重要資料があり、山崎敏夫氏が集められた愛知県 べられて、きわめて貴重である。東海地方に限って 歌へ」の課題について、いろいろなことが思いうか 旧蔵書目録』を眺めているだけでも、「和歌から短 これから大いに活用させていただきたいと思ってい 本文学説林』所収)と椙山女学園大学に入った山崎 いえば、蓬左文庫には尾崎久弥氏旧蔵書の牧水関係 る。いま、非常にていねいに編集された『雑賀重良 私は、まだほんの一部を拝見したに過ぎないが、 近代短歌の研究は大きく進展することと かつて一見した本美鉄三氏の

大阪大学名誉教授

用いただいています。 般公開(予約制)を開始し、 書目録』を刊行するとともに、昨年十月一日より一

すでに多くの方にご利

の蔵書の整理が完了しましたので、

『雑賀重良旧蔵

展示室

雑賀重良旧蔵歌書 和歌の伝統から近代短歌へ 2 |

四月十七日~五月十二日 五月十五日~六月十三日

系図

七月十日~八月十一日 八月十四日~九月十二日

◆雑賀重良旧蔵歌書

和歌の伝統から近代短歌へ―

年十二月に蓬左文庫に寄贈されました。蓬左文庫で 集され、一八、二〇〇点余に及びます。 代の雑誌まで和歌に関する書籍・雑誌が網羅的に収 近代短歌を中心に、江戸時代の刊本、写本から近現 知られた雑賀重良氏(一九〇〇~八三)の旧蔵書で、 雑賀重良氏の没後、ご遺族によって、昭和五十八 雑賀重良旧蔵書は、和歌書の収集・研究家として

夫氏(大阪大学名誉教授)のご指摘(二・三頁参照 代短歌への展開を物語る短歌雑誌、 開の開始を記念しまして、再び「雑賀重良旧蔵歌書2 展」として、旧蔵歌書のうちの、代表的なものの、ご 人歌集や合同歌集の初版本をご紹介します。 く一部を紹介しましたが、 今回の展覧会では、①伝統的な和歌から、近・現 昨年一月から三月にかけて、 和歌の伝統から近代短歌へ―」を企画しました。 雑賀重良旧蔵書の閲覧公 「雜賀重良収集歌書 ②近代短歌の個

> もいうべき資料群でありますので、ぜひご覧下さい。 のとおり、これらの資料は、雑賀旧蔵書中の精華と

ています。 譜もそうした口承系譜を文章化したものと考えられ き記される以前には、一族の系譜は口頭で語り伝え もので、系譜ともいわれています。系図が文字で書 系図は、氏族や家族の血縁関係を書きあらわした 埼玉県稲荷山古墳出土の鉄剣銘の乎獲臣の系

ものでしょう。 た『新撰姓氏録』(八一五年成立)などが代表的な た文章系図は、諸氏族の本系帳や、それらを集成し 文章で書き記したものと推定されています。こうし 天皇家の系図を、系線で図示したのではなく、 『日本書紀』に付された系図一巻は現存しません

を示し、横の系線で兄弟・姉妹関係をあらわし、紙 四六七~七七)のころには、偽って武家の身分を得る (一四一六年成立)を撰進しています。 中世武家にお の勅命により、皇室系図である『本朝皇胤紹運録』 公定の孫満定は、後小松天皇 (一三七七~一四三三) 般的な形式となり、現在にも引き継がれています。 があらわれました。横系図は、中世以降の系図の一 を横に長くつなげて右から左へ書きついでいく横系図 示する系図が生まれてきます。縦の系線で親子関係 ために、系図の売買が横行したと伝えられています。 いても系図の作成が盛んとなり、応仁・文明の乱(一 をはじめとした公家・武家諸家の系図集です。また、 編纂図本朝尊卑分脈雑類要集)です。本書は藤原氏 〜九九)が諸家の系図を集成した『尊卑分脈』(新 近世では、 中世を代表する系図は、公家洞院公定(一三四〇 古代の文章系図から、やがて系線で親子関係を図 江戸幕府は寛永・貞享・寛政と三度に

> います。 の他の諸家においても、 諸家譜』(一八一二年成立) を編集しました。大名そ わたって大名・旗本から家譜・系図を書き上げさせ、 『寛永諸家系図伝』(一六四三年成立)、『寛政重修 系図作成が盛んに行われて

ちから、各時代の代表的な系図を採り上げるととも 宜ご紹介します。 に、尾張藩主家、 今回は、蓬左文庫に多数所蔵されている系図のう 同藩士、 藩領内の諸家の系図も適

中近世の歴史研究にとって重要な史料である、 思います。本年度後半の展示会では、系図と同様に 分な検討を行えば、貴重な史料として活用できると 史料としての信頼性に欠けるともいわれますが、 系図については、 古城記・合戦記をご紹介する予定です。 古い部分は作為や伝承が多く、 +

雜賀重良氏略歴

若くして和歌に関心を持ち、 一九〇〇 (明治三三)、 名古屋に生まれる。 歌書の収集・研究

賞(くちなし賞)を受賞。 一九七三 (昭和四八) 二月、 CBCクラブ文化

される。 同年十二月、遺志により蔵書が蓬左文庫に寄贈 一九八三(昭和五八)九月、八十三才にて没。 の研究を、「尾三歌書年表」として刊行。 同年三月、長年の尾張・三河の和歌書について

同年八月、「雜賀重良旧蔵書目録」刊行。 展示「雑賀重良収集歌書展」開催。 一九九八(平成十)一月、全蔵書の整理が完了。 閲覧(公開)開始(予約制)。



三木露風歌集『夏姫』初版本 右から『夏姫』初版本、中が複製本 (昭和54年、霞城館)、左が家森長 治郎「『夏姫』について」(複製本 解説) (2-3頁参照)



『狂謌弄花集』 3 種 右から文化14年春出版の私家版、 中は京・須磨勘兵衛無刊年版、 左は文政 3 年美濃屋市兵衛等尾張書 林四店板(表紙は「狂歌百人一首」) (6-7 頁参照)

蓬左文庫蔵雑賀重良氏旧蔵狂歌資料

川了

『尾三歌書年表』(昭和四十八年刊)で知られる報賀重良氏の旧蔵書は、昨年平成十年八月にその目録が公刊され、十月から待望の閲覧開始(事前予約録が公刊され、十月から待望の閲覧開始(事前予約録が公刊され、十月から待望の閲覧開始(事前予約録が公刊され、十月から待望の閲覧開始(事前予約録が公刊され、十月から待望の閲覧開始(事前予約録が公司されてみたい。とれてみたい。

れたことがない。 からぬと残念がられた本であり、 が知られていて、 である。本書は従来、其律追善集としての書名のみ よはひ四十にひとつをあまし」とあることに明らか 十二。十八九の時、 園斎米都の序に、 の没年月日についても、其律の師である名古屋の秋 善をいとなむものならし」とある。 また諸説ある其律 ある。其律門人だった編者可童の宝暦十一年正月二 編者で知られている)の百ケ日追善集『時雨の月』で 屋の永日庵其律(貞柳十三回忌追善『狂歌秋の花』の 跋刊・六頁写真)は原書名の記載を欠くが、実は名古 ことし(宝暦十年)かんな月中の七日病床に終る。 日に諸士の追悼を書集め、しぐれの月と名を付て追 十六日付の跋に、「ことし正月末の六日、先師の百ケ まずは大坂の鯛屋貞柳によって広まった上方狂歌 省斎可堂編『狂歌集』(仮題一冊、 かの市橋鐸氏でさえその所在が分 「永日庵兀斎其律、予に若きこと 予に狂哥を問ふ。(中略) 惜哉 内容は全く紹介さ 宝暦十一年

真柳の高弟だった前出の米都も詠を寄せている明和七年の『歳旦』(一冊、刊本)もまた希覯本である。美濃神戸の人々の歳旦狂歌集で、かような本があること自体、今まで全く知られていなかった。名古屋不二見原の烏川を中心とするグループ「慮竹斎古屋不二見原の烏川を中心とするグループ「慮竹斎古屋不二見原の烏川を中心とするグループ「慮竹斎古屋不二見原の烏川を中心とするグループ「慮竹斎古屋不二見原の烏川を中心とするグループ「慮竹斎古屋不二見原の烏川を中心とするグループ「慮竹斎古屋へはすでに爛熟期の江戸狂歌、つまり天明狂歌が大流行しており、尾張の人々もすでにこれに参加している。あるいは本書あたりが尾張での上方系狂歌ない。

可欠な資料であろう。 書は、美濃における上方系狂歌壇を知る上で必要不 蔵本だけのようである。『歳旦』を含むこの三部の 衛板は、大妻女子大学蔵本と西島氏未見の雑賀氏旧 も伝存原本が少なく、 米都閱、明和七年三月刊)は近時、西島孜哉氏等編 部」にみえる三休斎白掬の編『狂歌気之薬』(一冊、 田代喜左衛門と判明する。『時雨の月』の 者米鳥のことも、本書によって濃州神戸小叡山下の 善六と尾張・風月孫助の相板である。米都門人の編 虫損が目立つが原装にして原題簽があり、京・丸屋 『近世上方狂歌叢書』二十四に翻刻されたが、これ 『狂歌教鳥』(一冊、明和七年五月刊)も伝本稀で 前述の『歳日』にも入集している月声斎米鳥の編 刊記を持つ初板の京・岡吉兵 「美濃関

た付箋(筆写不明)がある。また「平出氏/書室記」也有がおり、彼の未刊の狂歌集『ぎやうぎやうし』也有がおり、彼の未刊の狂歌集『ぎやうぎやうし』也有がおり、彼の未刊の狂歌集『ぎやうぎやうし』也有がおり、彼の未刊の狂歌集『ぎやうぎやうし』也有がおり、彼の未刊の狂歌集『ぎやうぎやうし』也有がおり、彼の未刊の狂歌集『ぎやうぎやうし』也有がおり、彼の未刊の狂歌集『ぎやうぎやうし』といる。

文庫が所蔵する。

文庫が所蔵する。

文庫が所蔵する。

本であろう。雑賀氏旧蔵書ではないがついでにいえ本であろう。雑賀氏旧蔵書ではないがついでにいえ本であろう。雑賀氏旧蔵書ではないがついでにいえ本であろう。雑賀氏旧蔵書ではないがついでにいえ本であろう。雑賀氏旧蔵書ではないがついてにおえている。

る。希覯本)、『狂歌蓬が嶌』 (二冊、 年秋酔竹老序、橘洲賛、月光亭哥政画。淡彩摺。板 まで、おおむねこの態勢が続く。この間の尾張板資 揮をうけざるは、まさに雪丸・田鶴丸・玉涌・金成 時点で「尾陽はすべて予が門葉のみにして、他の指 者だった江戸の唐衣橘洲(酔竹庵)は、 序、酔竹庵橘洲賛、享和二年正月三蔵楼〈田鶴丸〉 元名はないが永楽屋東四郎の蔵板目録に本書名があ 金成・雪丸編『狂歌ねがひのいと』(一帖、 料を雑賀氏旧蔵書から抜き出してみると、田鶴丸・ 橘洲没(享和二年七月)後のおよそ文化末年あたり し」(後述『狂謌弄花集』)といっている。 ・桃吉・有文の諸秀才、よく衆をいざなふ故なるべ 次に天明狂歌を頂点とする江戸狂歌系。その先駆 詳細後述)がある。 永楽屋東四郎製本)、 『狂謌弄花集』(一冊、 石川雅望〈五老 寛政九年の 寛政十二 尾張では 刊

文化に続く文政期以降を含め、概して尾張板は現

水日名元者共演了多元中二天九の時事がからで向か数月刊之主をと得地の下了を新からなる小型のかりのでは小天生一次なる。 市でのまとず一分様のの事と何世を見らんをするまからいすられる中の野か

勘兵衛無刊年板、改題無刊記本 『画像狂歌百首』(明 文政三年美濃屋市兵衛等尾張書林四店板、京・須磨 として文化十四年春に出版され、以下同年七月修訂 る本居内遠その人である。本書は初め輯者の私家板 佩詩堂右馬耳風 (後、榛園秋津とも)、すなわち名 著名となる。輯者は玉湧の門人だった新進気鋭の後 ンバーで、橘洲の一文は後に四方赤良(大田南畝) の橘洲の一文を積素亭(雪丸)が付す。堂々たるメ 玉湧(玉涌の息子)等、序文代わりに寛政九年五月付 校者月花庵(雪丸)、画者有文・月光亭墨僊(哥政)・ ち重出二十七人)七一三首を収める。撰者田鶴丸、 々な分野のすべて尾張の人ばかり総勢六一七人(う げたもので、織田信長以下当代人にいたるまで、様 写真)があるのはさすがである。 賀氏旧蔵書に文化自店板と改題本を除く三種 治摺、橘洲の一文欠)の計五種の多きを数える。雑 自店板(新たに同年月付の輯者跋を付す。以下同じ) 古屋書肆万巻堂菱屋久八で、後に国学の本居家に入 て追加され、 |本文としては半丁に一人一首をその像とともに掲 :本が少ない中にあって、 『狂謌弄花集』である。頭書形式を採用しつつ、 『奴凧』に美織屋主人(達磨屋五一)によっ 江戸狂歌の起こりを記した文章として 例外かつ特筆すべきは右 (五頁

帛一声』(一冊、嘉永六年九月藤原季知卿 元不明)の他、便々館琵琶彦・便々居琵琶人撰 冊、自序、文政期刊玉華堂板の後印松屋平兵衛板)、 花山亭咲馬(笑馬とも)の編・画『那古野於媚』(一 人〉序、森高雅等画。琵琶連蔵板か)、柴田玉淵子 同編『誹諧歌玉光集』(一冊、 のをあげておくと、洒落本『青楼玉語言』や人情本 『津多加津羅』等の戯作でも知られる尾張藩士玉斎 ついでに文政期以降の雑賀氏旧蔵尾張板の主なも (竜屋・弘器・海城とも)編『狂歌常鎮集』(角 、嘉永二年二月自序、 〈芸亭主 | 裂 板

> 張藩奥坊主で後に江戸市ヶ谷藩邸へ出た同時期の西 御膳判『狂歌はつみどり』前・後編 歌活動はすこぶる活発である。 四三はその追善集で像がある)などと同様、その狂 来居未仏(前号、瓢簞園・一寸法師。目録番号五一 判者となっており(文政十年刊『狂歌人物誌』)、 る。彼は文化十二年に江戸の六樹園石川雅望の五側 学者鈴木朖の姉リトの養子で、官医の柴田承慶であ ・安政頃刊。メ側蔵板)などがある。右の竜屋は国 画。那古野常鎮連蔵板か。編者の像あり)、赤の 「繡像」。一 1111 安政二年鷦巣老人序、 (合一冊、嘉永 尾

月八、九日詠)が他所にその名を聞かない。 は四世浅草庵)の『擣衣百首』(一冊、天保十三年八 が、熱田出身の戯作者笠亭仙果(高橋広道、狂歌で がある。長雄関連以外では、純然たる狂歌ではない なお目録番号五○九九の刊本『狂歌集』に長雄の像 りちと点が高く(辛いの意)御座候。御堪忍可被下 といった当時の慣例や、「江戸の点、出版物故常よ づ、御した、めがよし」(目録番号五○八六『狂歌』) 彼らとの関連が注目される。また添削を受けるため 鶴丸・秋津・竜屋・未仏・竹意庵為麿などの批評や 類という点にあり、一次資料がこれほどまとまって 張海西郡大宝新田の地主長尾治右衛門)の狂歌詠草 れる他、入花(添削料)が記されている場合も多い。 候」(同五〇八九『狂哥詠艸』)といった事情も窺わ には「詠草認めやう、ひとひら(半丁の意)に二首 いるのは珍しい。文政期のものが主で、六樹園・田 が、星橋楼寿長雄(物成長丸・千歳楼霞吸とも。 についてである。特色はその大半を占める五十余点 以上は江戸狂歌系の刊本であるが、次はその写本 尾

ば どを記した事前配布の「チラシ」は、済んでしまえ 無用となるため伝存稀で、 最後に狂歌会等の一枚摺。題や投吟期限・入花な 単独では雑賀氏も所蔵

> がある。雑賀氏旧蔵一枚摺資料はすべて江戸狂歌系 それに大関以下の相撲の位を冠した「番付」の二種 園撰『列僊列女画像集』(文政七年刊) や未仏等撰の 文庫に収まったことを喜びたい。 雑賀氏の旧蔵書がまとまって、それも由緒ある蓬左 表の印刷面のどこかにその名が出ているはずである。 目につくが、これは配布先を示すメモで、一般には は、所定の得点合計順に得点と狂名を東西に分けて のためのチラシ計六枚が収まる。事後のものとして **六樹園一周忌追福 『春のなごり』 (天保二年刊) など** 五一〇三・五一〇五の各本の中に、四方真顔・六樹 していない。 資料的なものが目立つ。裏面の隅に小さく「作州川崎 (分けない場合もある) 一覧表にした「甲乙録」と、 、思々堂之々大人」などと書き付けられているものも あらあら記してみた。尾三に造詣深かった しかし目録番号五〇二六・五〇四 追善・賀会・待受といった伝記

のこの事後のもので、

お知らせ一関覧室より一

◆「雑賀重良旧蔵書」は、蓬左文庫にて閲覧する ことができます。

別棟収蔵の為、閲覧は原則として事前予約制 となります。閲覧希望日の3日前までに、文書 または電話で蓬左文庫までご連絡ください。

◆「雑賀重良氏旧蔵書目録」販売中 ¥5,000 送料 ¥520 郵送での販売をご希望の方は、上記金額を現 (送料分は切手で 金書留にてお送りください。

くわしくは、蓬左文庫までお問い合わせくだ さい。

◆表紙さまざま (表紙口絵解説)



睡蚕謾筆

ように思えるが

正信が古今東西の

江戸時代末期写 23.5×16.7cm

表紙の意匠としてみても、 T 入政四年 物から はまことに似 いる 坤二冊、 青牖叢書目 いる。 ごろまでの、 のに適していたからと推測され であろうか 紙質の丈夫な折暦の用紙 書き伝えた記録の表紙を飾るのに、 (一八三一) 『尾張人物志略』、 録 つか など、十冊を超えている。 内宮暦・山田暦が使用され わ から嘉永三年

家伝に向けられていたことが知られ 巻初には、 て、 |舞中央図書館に所蔵され 編さんの際に書写された抄録本 は、 主家大道寺家の 伝 当文庫の正信自筆本のほ)略系図を記載してお (物逸話などをおさめている。 である重臣諸 れている 一駒・成瀬氏など尾張藩 かに、 が る。 正信の 家の家系・ 『名古屋市 名古屋 「睡蚕謾

治山田

三重県伊勢市)で刊行されたものとい

伊勢神宮の門前町字

寛永九年(一六三二)以降に、

手により、

書名が墨書され

る。

伊勢暦とは、

の伊勢暦が用

いられ、

木版刷

の題簽には

西暦

四

あるように、天保一三年(干支壬寅)

「天保

一三年ミつのえとら乃寛政

暦

〇四冊、 文政 道寺家の、 から、 書写した五○○冊を超える蔵書を残した。 での世相に関する見聞を記録した「青窓紀聞」二 れている。 て書き留められたものもあろう。 叢書」一〇三冊、 する意見を交換し、 田切春江らと、 水野正信は、 野正信の残した蔵書の中には、 |元年 (一八一八) から明治元年 (一八六八) 「同好会」を始め、 海外情勢、 また、 用人兼認物物留としての職務に関 小寺玉晃・神谷三園・ 尾張藩の海防政策を担当した大 天保年間 (一八三〇~四 海防関係の文献を集録した「青 「資治雑笈」九四冊など、 互いに見聞を広めたといわ 毎月例会に古物・古事 結局、 「睡蚕謾筆」と 岡田 正 信は、 四 文 自ら 園 ま 13 末

されている。

なお、

「寛政暦」とあるのは、

、従来の宝

(りが多いため、幕府が天文方高橋至時 寛政九年(一七九七)に改訂させたも

たこともあ

御師が毎月十一 版元があった。

路では、

全国 って、

[の頒暦の半分を占めるに至ったと

伊勢暦は全国に広まり、

江戸

一中期

一月に神宮の大麻とともに頒布

伊勢参宮者の増加や、

伊

勢神宮

降は、佐藤氏が版 部」とあるように、 れている。内宮暦は、

元であり、

、他方、 (一六八四

山田暦にも多数

一八八八)

以

貞享年間

本表紙に

一伊

勢内宮

織

に命じて、

天保一三年の天保暦制定まで用いられ

睡蚕謾筆」は、

水野正信 (一八〇五

~六九)

0

0

書名は、正信の号

「酔讃堂」に因むものと

る。

正信は尾張藩重臣大道寺家の用人を勒

尾張藩士天野信景の随筆

「塩

(一七八二年成立)

に似て、

古今の書籍を引用

同

伊勢暦を表紙に用

いたものが、

『思栄録

『武野燭

談

蓬左文庫は、蔵書点検のため、下記のように休館させていただきます。 平成11年6月15日(火)~6月27日(日)

名古屋市蓬左文庫

が、表紙に

一八五

〒461-0023 名古屋市東区徳川町1001番地 2 (052) 9 3 5 - 2 1 7 3

◆交 通

名古屋駅、栄より 市バス(基幹バス2番)・名鉄バス(「本地ヶ原方面」行) 「新出来」下車、徒歩5分 大曽根より JR中央線「大曽根」下車、南口より徒歩10分

開館時間 午前9時30分~午後5時

日 毎月曜日、第3金曜日

> 祝日(日曜、月曜のいずれかに重なる場合は、日曜 開館、月、火休館) 特別整理期間(2週間)

年末年始(12月28日~1月4日)

覧 館内のみ。館外貸し出しはいたしません。 閱

閲覧時間 閉架図書 午前9時30分~12時 午後1時~5時

開架図書 午前9時30分~午後5時

複写サービス 保存上支障のないものについて、マイクロフィルム 複写などの方法により行ないます。

電話・郵便による申込みも可。

取扱い時間 午前9時30分~12時 午後1時~5時

所蔵資料のうち30件程度を随時展示。テーマ、期間、 回数は、年度により異なります。

「蓬左」第60号 ☆平成11年4月17日発行 ☆編集・発行:名古屋市蓬左文庫(東区徳川町1001番地) ☆無料 ☆不定期刊行 ☆印刷:菱源印刷工業(株) ※この冊子は再生紙(古紙配合率100%)を使用しています。